

令和 8 年 2 月 14 日

講演者：太田 登氏（五條市史編集委員会 文学文芸部会員、天理大学名誉教授）

☆要約

この講演は、五條市史文学文芸編発刊記念リレー講演会の第 6 話として開催され、太田登氏が「藤岡玉骨における与謝野寛、晶子、石川啄木との交流」について講演されました。

太田先生は、藤岡玉骨（本名：藤岡長和）が五條市近内出身で、東京帝国大学法科を卒業したエリート官僚でありながら、文学活動にも熱心に取り組んだことをまず紹介されました。

続いて、先生は昭和 46 年に玉骨の妻うた代さん（当時 86 歳）に直接インタビューした経験を語り、その時の貴重な証言が研究の出発点となったことを明かされました。

玉骨の文学活動は『明星』時代から始まり、明治 39 年 11 月号に「歌なりぬ我が胸せちにあこがれて君を恋しと知り初めしゆゑ」という歌で初登場しました。

『明星』時代の玉骨について、先生は『明星』終刊号（明治 41 年 11 月）で首位に 3 首掲載されたが、同時期の石川啄木が 52 首発表していたことと比較し、両者の文学的力量的差を指摘されました。

次に注目すべきは、大和高田市から発行されていた地方文芸雑誌『敷島』での活動です。

太田先生は学生時代に中川印刷所を訪れ、オリジナルの雑誌を調査した経験を語られ、その際にこの雑誌で啄木と玉骨の歌が見開きで掲載された貴重な資料を発見し、啄木の「澎湃として目に迫る白浪の前に立つ如し危き心」と玉骨の「血の色の星を点じし無名指の君が指輪の紅玉を吸ふ」が対比的に編集されていたことを紹介されました。

『スバル』時代、玉骨は 74 首を発表し、特に「にがよもぎ」31 首では恋の物語性を持った連作を展開しています。先生は「薄荷酒に似て青き夜の流れたる加茂の木の間の夏の逢引」から始まる 4 首を例に、恋の始まりから終わりまでのドラマ性を解説されました。

昭和期の『冬柏』時代には、与謝野夫妻との密接な関係が深まったことが紹介されました。太田先生は、玉骨が与謝野寛から受けた厳しい添削の実例を示し、45 首送って 14 首しか採用されなかった事例や、「木蓮に媚ぶる日光を吸ひに来し青き裾曳く孔雀のをとめ」の「木蓮に媚ぶる」という表現が「論外なり」と酷評された例を具体例として紹介されました。

また、書簡資料から、玉骨の「波のまの浮標につと立ちつと来たる」が寛の添削により「波に浮くブイにつと来てつと飛びぬ港の鷗ものを思はず」に変化した過程を詳細に説明されました。

石川啄木との交流では、明治41年10月17日に玉骨が啄木の下宿を訪れた際、啄木が日記に玉骨のことを「イヤな顔な男だった」と記したエピソードを紹介され、決して両者が当初から意気投合したわけではなかったことを語られました。それに加えて11月21日には啄木が玉骨から3円(当時の1ヶ月分の下宿代に相当)を借り、浅草で遊興に使ったことを明かし、啄木の人間性にまつわるこぼれ話も併せて紹介されました。

啄木との交流において重要なのは、天理教にまつわるお話であると太田先生は指摘され、11月14日の再訪時に玉骨が天理教の話をし、啄木がこれに興味を示して「天理教には多少共産的な傾向がある」と日記に記し、後に『赤痢』という天理教の布教師を主人公とした小説を執筆したことにつながった経緯を説明されました。

社会的な交流では、玉骨夫妻が河崎なつ(五條出身の教育者)を通じて市川房枝との婦人参政権運動への関わりや、賀川豊彦の労働争議支援要請など、大正デモクラシー期の社会運動との接点を持ったことも紹介されました。太田先生は、大正10年7月30日の与謝野寛・晶子からの書簡で、神戸の川崎重工・三菱重工のストライキで逮捕された賀川豊彦の救済を玉骨に依頼した内容を画像資料を用いて説明されました。

☆講演の内容

○太田先生の研究経緯と藤岡家との出会い

講演の初めに、太田先生は、学生時代に石川啄木をテーマとした卒業論文を執筆する過程で、啄木と奈良との関わりを発見したことを語られました。昭和 46 年に近内を訪れ、当時 86 歳だった玉骨の妻うた代さんに直接インタビューした貴重な体験を紹介されました。当時は交通アクセスが不便で、奈良市内から近内まで半日かかったこと、うた代さんが一間だけで生活していた状況、そして彼女の記憶が鮮明だったことを印象深く語られました。この出会いが太田先生の藤岡玉骨研究の出発点となったことを強調されました。

○藤岡家資料の整理と企画展

太田先生は、平成 31 年 3 月に奈良まちづくりセンターが文化庁の助成を受けて作成した藤岡家住宅の報告書について紹介されました。そして、市立五條文化博物館（以下「博物館」）の山本学芸員が藤岡家関係資料の整理に尽力し、「うちの館」の川村優理館長も貢献したことを紹介されました。令和 2 年に博物館で開催された「藤岡玉骨と与謝野晶子展」について触れ、コロナ禍で一時延期されたが最終的に開催されたことを説明するとともに、太田先生自身も講演予定だったが、コロナの影響で見合わせとなった経緯を語られました。

Ⅰ 藤岡玉骨の文学活動

(1) 玉骨のプロフィール

太田先生は藤岡玉骨の基本的なプロフィールを説明されました。玉骨は藤岡家の長男として生まれ、母親のナラミツは大和郡山市出身であることを紹介しました。特に母親が天理教の分教会設立前後の時期に大和郡山の今国府町で生まれたことが、後の玉骨と石川啄木の天理教に関する会話に影響を与えた可能性を指摘されました。そして、玉骨は地元小学校から京都第三高等学校、東京帝国大学法科へと進学し、エリート中のエリートコースを歩んだ人物であることを強調されました。

太田先生は、玉骨とうた代さんの関係が与謝野夫妻と同じパターンの不倫的結びつきであったことを説明されました。うた代さんは再婚で、すでに一度結婚していた女性が学生の玉骨と恋愛関係になり、離婚して東京で結ばれたという経緯を述べ、この道筋は与謝野晶子が堺の駿河屋を飛び出して鉄幹と結ばれた経緯と酷似していることを指摘し、明治時代としては大変なロマンスであったと評価されました。

続いて、玉骨が大学卒業後に内務官僚として歩んだ道のを説明され、戦時中は地

方知事を務め、戦後は南都銀行の重役や岸和田紡績の取締役として実業家としても活躍したことを紹介されました。このように玉骨が官僚と実業家の両面で成功を収めながらも、生涯にわたって文学への情熱を持ち続けたことの意義を強調されました。

(2) 『明星』時代

太田先生は玉骨の文学活動の出発点である『明星』時代について詳細に語られました。京都第三高等学校の学生時代に与謝野鉄幹と知り合い、明治 39 年に東京新詩社に入社したことを説明されました。同年 11 月号の『明星』に「玉骨」というペンネームで初めて短歌 4 首が掲載され、その中の「歌なりぬ我が胸せちにあこがれて君を恋しと知り初めしゆゑ」を紹介されました。ただ、太田先生はこの歌について、個性がなく『明星』のロマンチズムに染まった典型的な作品であるとの評価を解説されました。

太田先生は『明星』が明治 41 年 11 月号で満 100 号をもって終刊したことを説明し、その最終号で玉骨の歌が「新詩社詠草」欄の首位に 3 首掲載されたことを紹介されました。その中の「その反響わが声よりも低かるに飽かねど山をわれ裂きかねつ」を例に、玉骨の歌を現実離れした幻想的な歌であると評価されました。一方、同じ終刊号で石川啄木が「謎」というタイトルで 52 首を発表していたことと比較し、玉骨の 3 首と啄木の 52 首という数量的差異から、この時点での両者の歌人としての力量差を明確に指摘されました。

(3) 『敷島』時代

太田先生は大和高田市から発行されていた地方文芸雑誌『敷島』で玉骨が活動していた時期について詳細に語られました。明治 40 年頃から 44 年頃まで発行されたこの雑誌で、玉骨が学生時代に実質的な中心人物として活躍していたことをうた代さんから聞いたエピソードを語られました。また、太田先生が学生時代に大和高田の中川印刷所を訪れ、『敷島』発行当時の社長の息子さんからオリジナルの雑誌を見せてもらった体験を詳細に語られました。保存状態が悪く、コピー機もない時代だったため、先生は手書きで目次を写し取った苦勞を紹介されました。

太田先生は『敷島』で啄木と玉骨の歌が見開きで掲載された貴重な発見について説明され、明治 42 年 1 月号に啄木の歌が 10 首掲載され、翌 2 月号に啄木の「危うき心」5 首と玉骨の「紅玉」5 首が見開きページで編集されたことを紹介されました。啄木の「澎湃として目に迫る白浪の前に立つ如し危き心」と玉骨の「血の色の星を点じし無名指の君が指輪の紅玉を吸ふ」を対比し、啄木が精神的不安定さを歌ったのに対し、玉骨はうた代夫人との婚約を恋の歌として詠んだと解釈されました。

(4) 『スバル』時代

太田先生は明治 42 年創刊の『スバル』での玉骨の活躍について説明されました。玉骨が全 74 首を発表し、投稿歌人から一步前進した段階に入ったことの評価に言及されました。特に明治 43 年 10 月号の「にがよもぎ」31 首から 4 首を抜粋し、恋の物語性を持った構成について詳細に語られました。「薄荷酒に似て青き夜の流れたる加茂の木の間の夏の逢引」から始まり、「をかしきは昨の別れに涙ぐみ俳優のごと抱きて嘆きし」まで、恋の出会いから別れまでのドラマを時系列で展開した技法を紹介されました。

太田先生は玉骨の恋の物語的歌風が与謝野晶子の影響を強く受けていることを指摘されました。晶子がこの時期に脂の乗り切った女性歌人として恋の歌を次々と発表していたことを説明し、玉骨が文学青年として晶子に心酔していたことを強調されました。同じ『スバル』明治 43 年 10 月号に晶子の小説「薄」が掲載され、玉骨の「にがよもぎ」と連続して編集されていたことから、両作品にハーモニーを持たせる編集意図があったと分析されました。

(5) 『冬柏』時代

太田先生は昭和 5 年 3 月に与謝野夫妻が創刊した『冬柏』に玉骨夫妻が深く関わったことを説明されました。玉骨だけでなく、弟の藤岡長衛（ペンネームは石井龍男）、妹の高橋英子も参加し、兄弟揃って『冬柏』に関わったことを紹介されました。太田先生が学生時代に東京九段下で料亭を経営していた高橋英子さんに直接インタビューした体験を語り、はきはきとした人柄で半日がかりで対応してくれた貴重な体験を回想されました。

太田先生は昭和 6 年 8 月の与謝野夫妻の関西旅行で藤岡夫妻が全面的におもてなしをした密接な関係について説明されました。しかし、玉骨が与謝野夫妻に歌を送って添削を受ける過程で、非常に厳しい指導を受けていたことを強調され、画像資料を用いて、昭和 6 年 6 月 18 日付の玉骨から与謝野夫妻への書簡と、寛による赤字の添削を詳細に解説されました。その中で、「波のまの浮標につと立ちつと来たる」が「波に浮くブイにつと来てつと飛びぬ」に変更された過程を具体的に示されました。

2 与謝野夫妻との交流

(1) 新進歌人への厳しい指導

太田先生は与謝野寛の添削の厳しさを具体的な数字で示されました。明治 43 年

に玉骨が45首を送ったところ、採用されたのは14首のみで、3分の2が不採用となったことを説明され、その中でも最も厳しい例として「木蓮に媚ぶる日光を吸ひに来し青き裾曳く孔雀のをとめ」に対する寛のコメント「『木蓮に媚ぶる』などの気の利かぬこと論外なり」を紹介されました。最終的に掲載された歌「わが椅子に近き日光を吸ひに来て青き裾ひく孔雀の少女」との比較を通じて、添削の徹底ぶりを示されました。

太田先生は与謝野晶子が夫の厳しい指導をフォローする役割を果たしていたことに言及されました。寛の厳しい添削に対して、晶子が必ず優しい労りの言葉を添え書きしていたことを紹介し、この配慮があったからこそ玉骨が挫折せずに続けられたと分析されました。そして、『冬柏』では玉骨が全165首を発表し、かなりの数の作品を残したことを評価されました。

(2) 晶子と河崎なつ、そして市川房枝との交流

太田先生は玉骨の交流の輪が広がる中で、地元五條出身の河崎なつとの関係についても詳細に説明されました。河崎なつが明治22年生まれて玉骨と同世代、五條小学校でうた代夫人の後輩だったことを説明するとともに、大正8年12月23日の書簡で与謝野夫妻が「大兄の御旧知河崎夏子さん」と言及していることを紹介し、なつが奈良教育大学からお茶の水女子大学へ進学し、五條出身女性として当時最高の学歴を持つ一人だったことを強調されました。

また、太田先生は河崎なつが晶子の関わっていた文化学院の国語教師となり、晶子から厚い信頼を寄せられていたことを説明し、さらに河崎なつを通じて市川房枝との関係が築かれ、うた代夫人が婦人参政権運動に関わったことを紹介しました。1945年の戦争終結まで女性に参政権がなかった時代背景を説明するとともに、大正時代から晶子が始めた婦人参政権運動の意義を強調されました。

(3) 賀川豊彦との交流

太田先生は大正10年7月30日の与謝野寛・晶子から玉骨への書簡をもとに、賀川豊彦との交流について説明されました。同年6月に神戸で起こった川崎重工・三菱重工の労働争議で賀川が逮捕された事件を語られ、前年に与謝野夫妻が賀川の案内で神戸のスラム街を散歩した経緯を紹介されました。賀川が神戸生協の創設者であり、労働運動と生協運動の両方に熱心だったことを説明し、晶子がこれらの社会問題に深い関心を持っていたことを強調されました。

3 石川啄木との交流

(1)「敷島」への原稿依頼

太田先生は石川啄木の小説『赤痢』が天理教の青年布教師を主人公とした日本初の作品であり、そのモチベーションが玉骨から聞いた天理教の話に由来することを説明されました。

玉骨と啄木との具体的なエピソードについて紹介され、明治 41 年 10 月 17 日に玉骨が啄木の下宿を訪れた際、啄木が日記に「イヤな顔な男だった」と記したこと、玉骨が戦後にこの日記を読んでショックを受けたことをうた代さんから聞いた体験を語られました。

さらに、11 月 21 日に啄木が玉骨の下宿を訪れて 3 円を借りたエピソードを紹介され、当時の下宿代が月 3 円だったことから、1 ヶ月分の下宿代に相当する大金を玉骨が即座に貸したことが明かされました。ただ、啄木がその金で浅草で遊興に耽ったことを批判的に紹介し、借金を返さない啄木の人柄について言及されました。

(2)「赤痢」と天理教

太田先生は 11 月 14 日に玉骨が再び啄木の下宿を訪れた際の天理教に関する会話について語り、啄木が日記に「天理教の話が興を引いた。天理教には多少共産的な傾向がある。もしこれに社会の新理想を結びつけることができれば面白だろう」と記したことを紹介し、これが翌年 1 月の『スバル』に発表された小説『赤痢』の創作動機となったことを説明されました。これに関して、玉骨の母親ナラミツから得た天理教の知識が啄木の創作に影響を与えた可能性を示唆されました。

○講演のまとめ

太田先生は玉骨が内務官僚としての道を全うしながらも、文学青年としての気骨を生涯持ち続けた人物であったことを改めて示されました。与謝野夫妻との交流が終生続いたのに対し、啄木との縁は啄木の早世(明治 45 年)により短期間で終わったことを説明するとともに、玉骨自身が戦後に啄木日記を読んで「若気の至りでうかつ千万」と回想したエピソードを紹介し、両者の立場の違いについて改めて言及されました。

○講演 Q&A

最後に、太田先生と参加者との間で質疑応答が行われ、具体的なエピソード等が共有されました。